

## やればやるほど順位は下がる？

佐久間敦史（大阪教育大学）

国際的な学力調査の話です。OECD（経済協力開発機構）が進めている PISA（Programme for International Student Assessment）と呼ばれる国際的な学習到達度に関する調査は、近年の日本の教育に大きな影響を与えています。その結果が昨年（2019）12月に発表され、日本の子どもたちの「読解力」の順位は大きく下がりました。以前にも紹介しましたが、いわゆる「ゆとり教育」を受けていない世代（2003年調査）が12位、「ゆとり教育」を受けた世代（2012年調査）が1位に上昇、その後、「脱ゆとり教育」に転じて（2015年調査）6位に下落、さらに今回は11位でした。時間や内容を減らした「ゆとり世代」が世界1位、「ゆとり教育」を批判し、躍起になって時間や内容を増やした「脱ゆとり世代」が11位とは皮肉です。

「学力低下」が言われた頃にちょうど、学校週5日制や「総合的な学習の時間」が導入（2002年）されました。「社会に目を向け、湧き上がってくる疑問や関心から自ら課題を見付け、情報収集・整理分析をし、まとめ・表現して…」といった学習です。当然、教室に座って教科書を覚えるような学習と比べ、今日、国際的に求められている資質・能力は高くなり、順位も上昇しました。今日は、土曜日にも授業をし、夏休みを短縮しても教科書をこなせない程過密で、「総合的な学習」に、本格的に取り組めない学校も散見されます。2020年からは、「ゆとり教育」以前の授業時数に増え、先生や子どもたちに、「ゆとり」はありません。そうした流れの中での、今回の順位の下落でした。

では、日本の子どもたちの「読解力」の、どこに課題があったのでしょうか。多くの子どもたちがスマートフォンを持ち、大人でも、電車の中や歩きながらでもゲームやチャットに夢中になる人が多くいるこの時代に、何と、「情報を探し出す」「質と信ぴょう性を評価する」「根拠を示して説明する」といった力が弱かったのです。2016年に成立した「部落差別解消推進法」の第一条には、「現在もなお部落差別が存在するとともに、情報化の進展に伴って部落差別に関する状況の変化が生じている」とあります。部落差別は今、インターネットを使って悪質化・巧妙化しています。「この情報は誰が発信しているのか」「なぜ発信しているのか」「世論の何%の意見か」「専門家はどのように言っているのか」「もし自分が誤った認識で発信したらどのような影響があるのか」など、人権感覚を伴った「読解力」のための教育が重要でしょう。